

## 平安初期物語に見える恋愛のグローバル化

マルティン・ティララ\*

### 1. はじめに

物語というジャンルが9世紀の終わりに現れたということは『源氏物語』の作者である紫式部の言葉でも証言されているが、具体的には、「竹取の翁は物語の出きはじめの親」とであると書かれている。言い換えれば、9世紀の終わりに作られた『竹取物語』は最も古い物語ということになる。この最古の物語は他の平安初期物語と同じように幾つかのモチーフを展開しているが、その中で最も多く書かれているのは恋愛についてである。恋愛は平安初期物語の唯一のモチーフではなく、メインテーマであったと考える。恋愛は全ての物語の共通テーマとして様々な視点から描かれている。そして恋愛というテーマは、古今和歌集などの勅撰集の和歌に比べ、物語において、より深く描写されている。

この発表では、平安初期物語に見られる恋愛の様々な話が他の文化圏の人々に理解できるのだろうか、欧米などの人々に受け入れられるのか、このような考え方はグローバル化しているのだろうか、という問題を、物語の具体例をあげながら、考究したい。

### 2. グローバル化

まず、平安初期物語のグローバル化の可能性を考えると、最初にグローバル化という現象は何

かということを考えなければならない。グローバル化、他の言葉でグローバリゼーションは、以下のように定義されている。

「国を超えて地球規模で交流や通商が拡大すること。世界全体にわたるようになること。」『大辞苑』

「世界的規模に広げること。企業経営で世界各地に複数の本社をおくことなどにいう。」『大辞林』

グローバリゼーションという言葉は1980年代から頻繁に用いられるようになったが、主に経済的、あるいは政治的な意味で使われていた。その後、それ以外例えば、社会的、あるいは文化的な意味でも使用されるようになってきた。グローバル化と共に、全世界に広がり、殆ど全ての人に受け入れられるグローバル商品というものが産み出されている。「グローバル文化あるいはグローバルな記憶を創り出す映画、テレビ、ビデオ、音楽、雑誌、ファッション、ゲーム、スポーツ、ツーリズム、そしてテーマ・パークなどは、グローバル商品の最も典型的な形態である。」『世界大百科事典』グローバル商品になっているのは、基本的に新しいものであるが、昔の作品もグローバル文化の対象になりうるに相違ない。問題は、平安初期物語のようなものはグローバル文化に影響があるのか、グローバル化に貢献できるだろうかということである。

---

\*カレル大学准教授

### 3. 平安初期物語の恋愛のグローバル化

『伊勢物語』などの物語に描写されている平安時代の社会はもっぱら貴族階級に属し、他の社会階級に対しては非常に差別的であったので、全ての人に好まれるとは思われないが、物語のメインテーマである「恋愛」は普遍的なテーマで、理解しやすい。もちろん、普遍性とグローバル化は同じ現象ではない。普遍性は「すべての物事に通じる性質。また、すべての物事に適合する性質。』『大辞泉』グローバル化は全世界的に広がっても、すべての物事に通じる性質ではない。だから、現代のグローバル化に貢献できるのは、当時の物語の作者の特別な恋愛観のみである。面白いことに、物語の作者は、貴族階級の人々の一般的な恋愛の経験と異なる、恋愛のスクランダル的な場面に着目している。作物語の場合も歌物語の場合も、主人公の恋愛に関する考え方と、主人公と他の登場人物の行動は基本的にスクランダル的であると思われる。

### 4. 婚姻の拒否

例えば『竹取物語』の女主人公である「かぐや姫」は、平安時代に大変重視されていた婚姻という概念を全く拒否している。婚姻は当時の人々にとってどれほど重要であったかということが以下の会話でも理解できる。

「この世の人は、男は女にあふことをす、女は男にあふことをす。その後なむ、門ひろくもなり侍る。いかでか、さることなくてはおはせむ」

かぐや姫のいはく、

「なんでふさることはし侍らむ」

と言へば、

「変化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむかぎり、かうてもいますがりなむかし。この人々の、年月を経て、かうのみいましつづ

たまふことを、思ひ定めて、一人一人にあひたまつり給ひね。」『竹取物語：14-15』

この会話では、継父に当たる「竹取の翁」が「かぐや姫」に結婚の必要性を説明している。現代語に訳すと、以下のようになる。

「この世界では、男性は女性と結婚し、女性は男性と結婚します。このように一族が繁栄するようにもなります。どうして結婚せずにいらっしゃってよいものでしょうか。」

「なんでそんなことをしなくてはいけませんか。」とかぐや姫が言えば、

「姫は変化の人でいらっしゃいますが、女性の身体をお持ちになります。わたくしの生きる限りは、今の独身のままでもおいでになれましょうよ。この方々が、長い年月にわたって、いつもこのようにおいでになってはおっしゃることをよく判断して、どなたかお一人とご結婚なさいませ。」

「かぐや姫」は翁が言うことがあまり分らないが、最終的に一人の婿を選ばなくてはいけな。しかし、自分のことを知らない男性とは結婚できない。その前、男性の本当の志を知りたい。

「よくもあらぬ容貌を、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ。」『竹取物語：15』

「美人でもないのに、相手の深い志をしらず、結婚し相手が浮気心を起こしたならば、後に後悔することになるでしょうに、と思うばかりです。天下の高貴な人であっても、御愛情のほどを確認せずには、結婚するわけにはいかないと思うのです。」

それで、相手の志（御愛情のほど）を知るため、

求婚者一人ずつに、手に入れにくい、厳密に言えば、この世界に存在していない物を頼む。この有名な五つの宝物、この「ゆかしき物」は全て道教に関係がある物で、不死（永遠の命）、あるいは飛ぶ能力を得るためのものである。ある説によると、「かぐや姫」はこの物を得て、また天女になり、月の都に帰る意図があったと解釈されている。また、「かぐや姫」は火鼠の皮衣のようなものがこの世界に存在していないことをよく知っていたという説もある。どちらにしても、結婚するつもりはなかったに相違ない。婚姻という概念をまったく拒否するのは、当時の、そして後の文学でも珍しかったであろう。しかし、現在、このような概念は、日本でも欧米でも、普通になっている。結婚したくない現在の女性たちが『竹取物語』を読むと、自分が選択した道に千百年以上前の前例があることが分かる。それで、結婚したくない女性は、自分が歩もうとする道を昔の文学作品の女主人公である「かぐや姫」も歩んだことで、勇気を得ることができる。そして、自分の選択はそんなに変ではないことも理解できるであろう。

## 5. スキャンダルの恋愛

『伊勢物語』の主人公は、『竹取物語』の女主人公に比べれば、より現実的であると言われているが、この歌物語のそれぞれの短い話のモチーフを考えると、「むかし男」という主人公は超現実的な面もある。「むかし男」は、平城天皇の子孫の在原業平であると昔から言われているが、在原業平は、『伊勢物語』の中では実在の登場人物というよりは架空の人物であり、当時の理想的な男性であったと言える。この男性「男」あるいは「むかし男」は理想的な文化世界の代表者であった。そして、その世界は日本の美意識に深い関係のある「みやび」の世界であり、この歌物語のテーマとしての恋愛にも関わりがある。「むかし男」というこの理想的な恋人に、貴族の娘たちが憧れを

持ち、また、男性のほうもこれを面白がっていた。作者は理想的な男性をもって、『伊勢物語』の段の中で恋愛の様々なアспект、あるいは恋愛のバリエーションを見せている。グローバル化の可能性のあるのは特にスキャンダルの話であると思われる。『伊勢物語』の主人公である「むかし男」は天皇の妃になる女性に恋をしたり、伊勢の斎の皇女に恋をしたりし、自分の妹にまで恋をしている。このようなモチーフはスキャンダルのみではなく、タブーを犯す行為である。特に69段の伊勢の斎の皇女の話はその例である。以下の部分はきっと全ての読者にショックを与えてきたことであろう。

「男はた、寝られざりければ、外のかたを見出して臥せるに、月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて、人たてり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率ていりて、子一つより、丑三つまであるに、まだ何ごと語らはぬにかへりにけり。」  
『伊勢物語：84』

「男も、女を思ってまた寝られなかったのも、外のほうを眺めやって臥していると、月の光がおぼろな中に、小さい召使の童女を先に立てて、人が立っていた。男はたいそううれしくて、自分の寝室に連れてはいり、子の一刻から丑の三刻までいっしょにいたが、まだなにも心とけて話しあわぬうちに、女は帰ってしまった。」（福井貞助訳）

伊勢の斎の皇女（斎宮）は伊勢神宮に奉仕した未婚の内親王であるが、この話では「むかし男」の所に行き、一緒に寝室で数時間過ごす。理想的な男性はこの内親王と寝たことで、罪を起こしたに相違ない。実は、この行為で間接的に伊勢神宮に祭る天照大神と寝たということになるので、天皇家の氏神の神聖を穢した。現在の読者にとっても驚かされる話であるが、それより驚くのは以下の49段の話である。

「むかし、男、妹のいとおかしげなりけるを見  
をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を

人の結ばむことをしぞ思ふ

ときこえけり。返し、

はつ草のなどめづらしき言の葉ぞ

うらなくものを思ひけるかな」『伊勢物語：  
63-64』

「昔、男が、妹のとても愛らしいさまを見ていて、  
若々しいので、添い臥したく見える若草のよう  
な美しいあなたを、人が妻とすることを惜しく思  
います。

と申し上げた。返しの歌、

なんと思ひもかけぬすばらしいお言葉ですこと。  
私はきょうだいだからと、ついうっかり、と思い  
申しおりましたのですよ。」(福井貞助訳)

この場合「男」は、自分の妹に恋をする。本当  
の妹か異母妹か分からないが、「男」はこの妹に  
性的魅力を感じているに相違ない。もし、彼女に  
本当に恋をし、一緒に寝たとしたら、平安時代で  
も許されないタブーを犯したということになる。  
この話でショックを受けるのは、平安時代の貴族  
だけではなく、現代の日本人や他の国の人たちも  
そうであろう。

## 6. 結論

このようなタブーを犯している話は別として、  
平安初期物語に見える恋愛観は現代社会にも出現  
している。もともとスキャンダルであったことが、  
現代ではスキャンダルではなくなり、一般的に  
なっていると考えられる。勿論、こういう  
話が現在普通になっているのは、平安初期物語の  
おかげではない。しかし、現代の人はこの物語の  
様々な興味深い話によって自分や周りの人々の行  
為が理解できるかもしれない。そうではなくても、

少なくとも昔の文学作品の中のスキャンダルを楽  
しむことができる。それで、平安初期物語を翻訳  
し、他の文化圏に広げる意味があると言えるので  
はないだろうか。物語に見られる恋愛の話をきつ  
といつかグローバル化できるであろう。

## 参考文献

- 片桐洋一・福井貞助ほか『竹取物語・伊勢物語・大  
和物語・平中物語』(新編日本古典文学全集)小学館、  
1994。  
野口元大『竹取物語』(新潮日本古典文学集成)新潮社、  
1979。  
渡辺実『伊勢物語』(新潮日本古典文学集成)新潮社、  
1976。  
『広辞苑』岩波書店、2008。(デジタルバージョン)  
『大辞林』三省堂、1995。(デジタルバージョン)  
『大辞泉』小学館、2012。(デジタルバージョン)  
『世界大百科事典』平凡社、2006。(デジタルバージョ  
ン)